

書名：本を読む本

著者：M. J. アドラー & C. V. ドーレン

訳者：外山滋比古・榎未知子

出版社：講談社

出版年月：1997年10月

総ページ数：265ページ

ISBN：4061592998



推薦者

村井万里子

鳴門教育大学大学院教授
言語系コース（国語）

この本と出会ったのは、大学構内にあった書店の棚でした。『本を読む本』という少し風変わりな書名に惹かれて棚から引き出してみると、白く柔らかいカバーにパステル調の色で「How to Read A Book」と表紙一面モザイク模様で原題が描かれた、絵本のような雰囲気の本でした。今は「講談社学術文庫」になっています。十数年間「絶版」が続いたあとの、待ちに待った「文庫化」（1997）でした。

この「本を読む本」という表題から、どんな内容を想像しますか。

私は読んでみて驚きました。それまで考えたこともなかった「本を読む技術」が詳細かつ整然と説明されていたからです。読み通すには骨が折れました。小・中学校で身につける「初級読書」に4つの段階、大人の読書法として「点検読書」「分析読書」「シントピカル読書」という3つの読書技術がある、という内容です。上位の読書法のなかには下位の読書法が入れ子状に順々に含まれていきます。逆に、「初級読書」のなかに大人の3つの読書法の「ひな形」が含まれているようにも受け取れます。これが当たっているか、あなたも確かめてください。

読書技術の中核は、本と著者に積極的に「質問」する「分析読書」です。私は高校時代、現代文の参考書や記述式文章題を解くことで質問力に目覚めました。単純に本を読み流しているだけでは「分析読書」の力はつきません。必死に読むためいつのまにか始めていた「書き込み法」も大いに推奨されていました。

この本で、私の苦手は「点検読書」だと思い知り、「大村はま」先生の「単元学習」が、「シントピカル読書」（主題読書）を使うことにも気づきました。「点検読書」は「シントピカル読書」の第1段階ですが、意外にむずかしい。卒業論文、修士論文作成に用いるのが、この「シントピカル読書」です。

以上のような「気づき」を手探りで拾い上げ、大学院生として最初の「演習発表」をやりました。私にとっては、まさに「思い出の1冊」です。

この本は1940年に米国で刊行されてすでに74年、ロングセラーの域を超えて「古典」の仲間入りを果たしたといつてよいでしょう。今私が本書の中で最も気に入っている部分は、「初級読書」について述べられている5ページ（文庫本 pp.32-36）です。ここに、「学力の発達」や、読書のなかで起こる「語彙の拡大」、新しい「ものの見方・考え方」獲得の秘密が、隠されているように思えるからです。

